

防衛召集は、ちょうど前の赤札みたようなものでした。学徒隊が出ていたような状況になってからは、十五六歳、十六七歳あたりからは、全部召集されたのではないでしょうかね、村役場を通して。

宮城 盛輝 動員は、島尻にも国頭にも、それから害築(戦車防害の石垣)とか、構築とか、地均しとかに特殊の技能を持ったあの熱田のセイゼン、ああいう人は、八重山にもやられた。特殊技能の人ばかりではない、あちこちの飛行場にやられた。今宮城さんが言われたのは、おにも翼賛会の関係、瑞慶覧さんの、その方はほとんど中飛行場だけで、そういうことでした。

飛行場づくりは、芋を食べますね。ところが小さいものを、乱暴な態度で「食へ」というんです、尽忠報国の精神だということなんです。足もちよつと引けないくらい、へとへとになるのです。顔も三日くらいは洗わなかったというのは、宮城さんのお話と同じです。

寝るところは、飛行場の中にブラックがあつて、床の上にゴロ寝ですよ。仕事は、土を掘るもの、それを運ぶことです。兵隊はそんなことはしないんです。

動員は、無料奉仕です。手間賃を取るといふことはないです。それから、動員関係もそうだし、山の木ですね、壕をつくったり、それから戦車壕をつくったり、戦車が通るのを停めるというので松の木を伐つて来て、縄できびるので、わしなんか墓地から山の木を相当伐られていますかね。一銭も代わってはいけません。それから供出も、芋や何や出したけれども、やはり一銭もくれませ

安里永太郎 あさつて敵が上陸するという三月の三十日にですね、屋原に、ズリガマという洞窟がありますがね、八十名くらい入れる壕なんです。そこへ中城の在郷軍人の幹部が集まりましてね、一死もつて報国の誠を尽そうという決意のもとに団結し、中隊をつくつて参加しようということになった。翌三十一日には、令状が来てですね、校庭に、あの時は喜舎場国民学校といました。その校庭に集つて、そこで賀谷部隊に配属されて、瑞慶覧中尉が隊長に命じられて、歩武堂堂と校庭でやりました。そうして屋原の今の将校俱樂部ですね、東がわに兵舎がありました。そこに守っていたところが、上陸とともに、四月一日、中城へ召集、それから行動を起し、具志(？)・棚原(西原村)・浦添(村)ですね、ああいうところに配置していったんです。

そうして上陸した兵隊がですね、三日目にはもう島袋を襲っているんです。そこで壕にたてこもっていた連中は、非常に恐怖を感じているところに、もうこれはおしまいだ、この世の見おさめだということ、そうですね、約千五百名のが、うろたえてしまったんです。泣き叫ぶものもあるし、なかなかおさまらない。その時この先生が(喜納昌盛さんを示す)立たれて、戦争というものは、兵隊と兵隊との戦いであつて、お前たちを殺すことはない。アメリカは紳士の国だ。もし万一のことがあつたら、わたしが真先に立って犠牲になろう、ということ、もうその時は、アメリカの兵隊が鉄砲を向けて来たくんです。

註、中城村といっしょであつた関係で、動員、供出、防衛召集、現地召集等をくわしく具体的に、かつ組織的に順序立って語

ん、金を取った覚えはありません。最初の食糧営団に納めていた頃は多少取っていたんです。それから、日本軍が、堅穴の壕を掘るでしょう、それでわたくしなんか、うちも新しかったが、兩戸を無理に脱いでですね、壕を蔽うてあつたですよ。それで戸が無いでは眠れないので、そこは浜辺の近くに掘つてあつたですがね、行って、それでもいいのかとかけ合つたら、やつと一、二枚戻してありました。返さないですよ。そういうことも当り前のようになっていた。

それから日本軍への協力ということですがね、十五、六歳から上の適齢期のは、男女全部が召集されました。あれは四月の一日であつたか、三月の三十一日か、三月の末です。女の子供(女子少女)は全部引率されて、中城城 趾へ行つたんです。軍からの召集で。適令の子たちは、うちにも娘がいましたからですね。軍からの召集というので、壕の中で、区長を通じてですよ。現実には区長から通知があつたので、壕の中で、鶏をつぶしてくれてやつたから、よく憶えています。適齢期の男女青年は、全部召集されて、中城城趾に集つたと思いますよ。それからずつと島尻の方へ軍といっしょに行つて、戦争が終るまでは、全然はなればなれで、あいませんでした。

宮城 善八 それはそうであつたでしょうね、わたしが棚原 線へ下つていた時でした。うちの部落の、今、比嘉光吉の家内のエミ子ですね、あれはあの時十六歳でした(今の日本年というはまだ十四か十五歳である)。その子が、軍の野戦病院で、かいがいしく働いていました。

つて貰えなかつた。しかし、供出の場合は、安谷屋部落で委細に実状がわかり、奉仕動員、防衛召集、現地召集等、また戦闘協力、などについても、中城村と合せて、各部落の地域座談会の出席等によつて、ほとんど遺漏なく記録ができたので、ここでは出席者の発言によつて、記載し、項目を立てて、まとめることを避けた。多少たりとも、事実を歪めることが文章のあやによつて出はしないかを惧れたからである。

また、動員、軍への協力、現地召集、防衛召集、義勇兵、勤勞奉仕等は、全県下が組織的に、同一であることが、調査ではつきりしている。したがつて、あちこちで、くわしく語られて記録される。

喜納 昌 盛(六十二歳) 村会議員

教員を三十三か年やりましたが、その後、住民から村会議員になれと推されて、村会議員になつたわけです。そうして村会議員になつたら、中城村全部で二十四名です。そうして上陸当時になつたら、村会を召集して、全会一致で久志村の瀬嵩に移動するようになったんです。その時にわたしひとり立って、出来ないかと断つたんです。そうしたら皆、わたくしに顔を向けて、小奴はいけない奴だ、どうしてそんなことをいうか、全会一致しているのにどういふわけか、善良の議員ではないでなかつたか、強く言われたんです。それでは理由を言いましよう。国頭(沖繩本島北部の総称)に行つたら食料がない。それから、アメリカがこつちを上陸するにしても、戦

は、兵隊と兵隊がやるのである。それからあつちには上陸しないと誰が保証するか。今度また四番目に、同じく死ぬなら、なぜあつちで死ぬか、これまではあたりまえに言ったが、おしまいに強く出て、もしアメリカ兵隊が鉄砲を向けたら、わしが真ッ先きになって見せるといったんです。そうしたら大馬鹿、これが相手にならんとって、議会を解散してしまつたんです。それからその翌日、村長、助役、収入役、県会議員、駐在巡查、議員全体、島袋（中城村）に押寄せて来たんです、わたしは島袋出身の議員だから。そうして吟味集会をして、あなたがたが出した議員は、どうもいけない、全会一致で移動を決議したが、ただひとり反対しているよ。だからわたしがいうとおりの移動するように、こうとき聞かしたですよ。その時にわたしはまた立つたですよ、行くな、わしがいう通りやれ、今いう通り食糧がない、同じ死ぬならこちで死ぬ、兵隊と兵隊の戦さであつて、人民は殺さない、そうわたしがいつたんです。そうしたらみんな怒っているんですよ、役所から来た人たちは。皆さん、心配するなというけれど、われわれ二十三名がいうのがほんとうか、これ一人がいうのがほんとうか、どっちにつくかと、いろいろとひどいんです。二時間ぐらい自分たちのいうのがいいよ、どうのこうのいうんです。それでわたしはまた立つて、もしアメリカ兵が殺すようなことがあるなら、わたしが真先きに立つ、それでも皆が行くというなら行きなさいといったんです。そうしたら、皆おちついてしまつたんです。それで村長や駐在巡查たちは帰つてしまつたんです。それでその後まあ、安心したとって、そのままも行きますんでした。

いかということになつて、金城というのがいたそうですが、喜納昌盛という人知らないかときいたが知らない。友だちにいないかか問われたらしいんです。ああいます。比嘉俊夫というのが、それで比嘉俊夫が来ているる訊ねるんです。君なぜそんなにわたしのことをきくかとたずねたら、デリー大学のロツジ博士から頼まれたというんです。あ、そうか、それじゃ書きなさいとってそれを送つたんです。送つたら、君あいたいとまた来ておるんです、手紙が。困つたな英語は知らないし、と思つていたんですが、比嘉俊夫というのが、わたしが案内しますから、英語の心配もするなとって、そうしていっしょに訪ねました。この方がこれです（写真を示す）。裏に英語で何か書いてあるでしょう。昨年八月でした。また手紙が来て、君のことを著書に書いてあるが、牧師は何とていうか、ただハイラーではわからんからな、ということまで牧師を連れて来て、人民を集めて、そうして講話を聴いたんですよ、第一回目的。これが第二回目（写真）これが第三回目。（写真）この写真は戦争当時、比嘉太郎が写したものです。

その後島袋の前に大砲をすえて、首里にどんでんやつていたんですよ。それからアメリカの日本語知っている、何とていつたかな、ああミヨハンという副領事が見えて、ここは危険だから、金武の福山に、移動することになつたんです。千五百名の住民全部、アメリカの軍のトラックで移動したわけです。それから福山で集団生活を始めました。それで昨年（一九六八）は住民皆で、ご招待して、歓迎会をやりましたよ。副領事です、日本の（駐日の意）。福山は、漢那（金武村、現在宜野座村）を越えて、宜野座字の上

それから四月一日もどうもない。二日目もどうもない。三日目は午後の二時頃だったんですが、アメリカ兵が鉄砲向けて来た。ああわたしの意見が間違つたかな、殺されねばならんかな、と思つた。それに英語知らんでしようまた、兵隊の前に行つて頭こうして（おじぎをする）、おかしいんです、まあ芝居です。それでおしまいに、「ユー、アメリカ、ゼントルマン」、といったんです。そうしたら變つた手真似をしたんです。何かな、と思つていたら、二世をつれて来たんです。その二世がこれです（写真を示す）比嘉太郎。これが、ああ、喜納先生といつて手を取つたんですよ。その時にアメリカ兵は銃を引いたんです。それで安心して、人民にももうどうもない、どうもない、安心しなさいといつて、これが教え子の比嘉太郎、（先に示した写真を出す）裏に書いてある。戦争中あつたということを。ここで学校出て、ハワイへ行っていたんです。それでその後、皆おちつかしたので、比嘉太郎に、教会を建ててくれといつて、これがはじめの教会で、これです（写真を見せる）。

そうしてこのことが、リーダスダイジェストに出たそうです。それをアメリカから各国にやつたらしいんですね。そうしたらイギリスからもドイツからも、イタリーからも、各国から「君は人を助けました」そうだなという手紙が来ておりました。これみんな貼つてあるんですがね、手紙も写真も、すべて持っています、これです。そうしてそれを昨年の八月に、アメリカのデリー大学のロツジ博士がですよ、これをこらんになって、珍らしいな、沖縄にもそんなのがいたかなといつて、手紙をわたしに下さつたんです。

その手紙を書かれるために、その先生の教え子に沖縄の人がいかにありますよ。移動したのは、六月の中旬だったですか、それまでは、島袋にいたんです。福山は今今は金武から分村しているので、宜野座村になつていましてね。そこに約一か年いたんですが、戦争は、行つてじき終つたので後悔したですよ。早くおしまになれば、移動させられなくてよかつたのになあ、といつて、後悔したですよ。

そうですね、四月三日から六月下旬に、金武村の福山に移動するまでの島袋での生活はすな、製糖工場がありましたからね。避難民は、東方面ばかりではない。島尻からも、首里や那覇の方からも大分来たんですよ。でその方がたにも、砂糖をだいが積んであるから、全部分けて上げたんですよ。それから軍の米も沢山積んであつたですよ。それも分けて上げたんですよ。それで皆喜んで、島袋での生活は、ゆつくりでした。島袋の建物は、部落にいる間は、一軒もこわされてはいなかつたんですよ。全部完全に残つていたんですよ。

ところが、福山から帰つて来た時には、一軒も残っていませんでした。島袋の字の一般住民で、部落に残っていた者には犠牲者はありませんでしたな。

福山に行つてからも、マリアはありましたよ。それで亡くなつた人はいません。子供がハブに咬れたのはいましたね、福山で。マリアは軽かったですから。

福山での生活は、最初は楽でしたが、最後は海の藻（ほんだわら）や芋の葉も食べたし、それさえもなくて、いっときは非常に困

りましたよ。

註、宮城盛輝さん発言。「先生のおっしゃるのは、島袋の部落はですね、戦争による戦争被害はほとんどないといっているくらいですね。ほかはですね、村でもですよ、疎開しています。働かないものは全部あそこへ行っておれと行って、疎開してですね。今お話のあった久志に行ったのは(司会者の質問)皆犠牲になっていきます。そうして、島袋が疎開しているのは、戦争が終了からですよ。この人(安里永太郎さんを示す)わたしといっしょに、喜屋武の福地ですね、あそこで六月の十九日捕虜になりましたのでね、この人はアメリカ帰りで英語を知っていたので、出て来いといったから出て行った。それでその時まで島袋という部落は、疎開も何もしていないから、いわゆるそこでの戦争被害というのは何にもないから、いわゆる福地で十九日に捕虜になって、伊良波(豊見城村)に移されて、それからまたコザに行きましてから、島袋はそれから移されています。戦争がもう終ったからですよ。わたしたちが捕虜になったのは十九日で、コザに来てからですから、戦争地域になる、危いから移せ、あるいは軍の施設をさうかという意味で移されたんですよ。僕等は、伊良波の甘蔗(カビ)の中で、CIDということで、あつちに一週間にわたってからコザには来たんですよ、島袋の移動は、完全に戦争が終ったからですよ」。

わたしは、聖書をずっと見ていましたから。戦前からわたしはクリスチャンです。あの時に、比嘉太郎が来たことは、神の助けだったかもしれないですね。世界各国から手紙は、沢山貰いましたな。

し合いは、夕方までに、めいめいで、役所のあったそこへ集れというように中隊長から命令が出て、そこからめいめいで下ったんですね。あの屋原、あつちへ行きながら一人怪我してすな、安谷屋(あぐや)の棚原正吉というものが足をやられて、今の中城の村長と三人行ってすね、そうして、その人を避難壕に預かってくれと頼んだら、入らないというんですね。多分、わたしたちが、そのまま預けっぱなしで逃げろと思っただけでしょう。収容する病院壕があるから、行って見て来る間預ってくれと行って預けて、それで砂所まで行って見ると、部隊はいないんですね。それでたそがれ時を待っていたんです。

それから、萩道(わがまち)に大きな壕がありますな、あれは野戦病院だったんです。むこうにも行ったんですが、そこも全部出て行って人ひとりいないんです。それから民家に入って、モッコと棒をさがし出して、足をやられている棚原を預けた壕まで戻って行って、城間盛栄さん(現在の中城村村長)と二人で、怪我しているのを担いですね、行ったんです。夕暮れになると、まあ、どんどん、どんどん、蟻(あま)がはい出るようにすな、騒いで南へ向かって出て行くんですね、民間人も、兵隊も。

それで少し後戻りになりますが、最初に配備した今の将校俱樂部では、三十一日の晩、そこで過して、翌日は、中城城趾でした。それでわれわれは、地理がくわしいというのでよく斥候に出されましたな。われわれは、前にもいいましたが防衛隊ではなくて、自分たちで志願したんです。大体三十五六名くらいだったすな。

仕事は、死体収容、弾薬運び、食糧運びです。食糧がどこにある

註、喜納さんのそれは、クリスチャン精神による強固な信念を持っていられたからだ、ほかの同席の方の発言が最後にあった。戦火の中に追いつめられて生き残った住民が、終戦後北部に移されて、飢餓による栄養失調とマラリヤのために、砲撃の犠牲に劣らない人命が失われているが、それに反して、島袋部落千五百余の生命が、一年間の疎開生活にも何んの犠牲もなかったことは、戦争中、三月の間、衣食住にそれほど不自由なく平穩に過して、移動の時には、米軍のトラックで、 possible の限り衣食を持って行ったからではないかと思われる。

宮城 善 八(三十一歳) 村戸籍係

今、永太郎さんが話されたのは、残っている村民自体がです。伊舎堂(いしやどう)(中城村)に瑞慶覧(みずかみ)朝敏(あさとし)といって、兵隊上りの若い中尉がおりましたが、その人が、役場吏員と消防団関係の方がた、学校の先生がたを集めて、一個中隊つくって、石部隊ですね、そこに入隊志願をすすね、そうしたら、あなた方は住民だから、帰り度い人は帰っていいという話をしました。

それでさっき話のあった屋原(やまはら)(現北中城村)の壕で、そういうことでも参加しようということ、それで三十一日の晩です、先生方、消防団、役所の吏員方。そうしてその晩、そこへ行ったたら、銃とか弾薬を渡してすな。あなた方は、屋原の守備につけということ、三十一日の晩、今の将校官邸のあの山ですな。翌日は、上陸というので、一旦また夜明け前に壕に帰って来て、そこでの話

ということ、それを担いだり、そういったものがおもでした。

それから新垣(しんがき)(中城村)の線から、西原(にしはら)の棚原(たなはら)にすな、棚原の部落の上に高台があるでしょう。そこが石部隊の本部だったんです。

そこで斥候に出ましたが、兵隊でわたしが階級が上でしたから、斥隊長になって、出かけたんです。わしが前になって、上等兵二人を真中にして、棚原の人で小橋川(こはせがわ)といったんですが、それを一番後にして出かけたんです。相前に前進してからでしたが、一番後になっていたその人が来ないんですね、はぐれてしまったらしいんです。それでわたしは上等兵二人を残して、さがしに戻って行きました。見当らないんですね、それでまた引返して、われわれは、できるだけあちこちを偵察して、いろいろな情報をつかまえて帰って来たんです。そうすると、翌日の夜明け方になって、その小橋川が帰って来ましたが、ここを(左肩)をやられていましたな。それで、棚原には野戦病院がありましたので、そこに連れて行ったんですが、それから三日くらいして死んだんですね、わたしたちは、立ち去った後で、死ぬのは見ませんでした。

もうその辺からは、食べるものは甘蔗(かんさ)だけですな。少し配給がある時もあったが、ほとんどキビだけです。兵隊といっしょに飯を食べるのではないんですね。われわれは、志願して自分たちで、来たんですから、食物は、兵隊からはありませんでした。沖繩戦の場合は、甘蔗(かんさ)がなければ、もっと死んだ人が出たんじゃないかな。

負傷者も野戦病院に運びましたし、死体収容をして最初の中は、

土を埋めて葬っていましたが、後になってからは、そのままほったらかしで、仕事も、雑役みたいなことですね。

それから前田（浦添村）に下りました。前田は二十日くらいいたじゃないですか。夜は日本軍が取って、昼はアメリカ軍が取って。昼は壕の中にいるんだから、何も見られませんか。石部隊は、あそこでは、大分やられたんじゃないですか。昼は一步も出られませんが、夜だけしか行動出来ません。それでわれわれが首里に引揚げた場合、交代した場合も相当やられたんではないですか。山部隊との交代です。前田を引き上げる時だったですか。腹はいになつてあるいている人を見ましたが、そういう時には、重傷患者は、やるのじゃないですか（毒殺の意）。両脚がなかったですが、壕から逃げて来ていたんじゃないですか。

夜になつてから負傷者を、死んだ兵隊の下からもさがして、野戦病院へ担いで行くんですが、大体はどこらあたりに負傷者がいるということ、指揮者がいて、収容に行くんですね。

前田から首里に後退するまでに、われわれの隊員でも、肩を取られて死んだ小橋川のほかに、そうですね、その間に六七人は死んでいます。最後に残ったのは、三分の一、十二三名はいいたですか。

首里にも相当長くいましたが、そのあとからは、組織がこわれて、ばらばらになりましたが、わたしたちは、六人グループをつくって南の方へ下つて行きました。

島尻行つてからこういうことがありました。わたしは煙草をのまないんですがね。そうしたらそばに壕があったんです。野戦病院

捕らえられてハワイへ行った組でした。

註、戦争中の記録は書きとめてあったが、失われてなくなつたということも話された。

安里 永太郎（四十二歳） 喜舎場郵便局長

わたくしはちょうど間もなく米軍が上陸するという三月三十一日にこの人（宮城現助役）たちといっしょに校庭に集りまして、戦争参加の決意をしていきました。

ところが、賀谷隊長が、公職にあるものは出よといったんで、それで今の立法院議員の平良幸市さん、あの方はこっち（喜舎場国民学校）の教頭で、わたしは喜舎場郵便局長だったので、あなたたちは職場を守っていなさい、といわれたんです。そうして、可働力のあるものは軍に送って、協力するように呼びかけて貰い度いということ、宮城さんたちの中隊から退いたんです。

それでも喜舎場には大きな兵営もあったので、銃後で働かなければならないと思つて、母と四男坊を壕に連れて行つて、命令によつて狩り出しをしたんです。家族は、熊本へ疎開させてありました。

そういうことで部隊から持つて来てある名簿によつて、壕に入っている可働力のあるものを、皆出さない、と廻りました。そうして考えて見たところ、自分の子供もいるんですね、可働力のあるものが。これは中学三年です。鉄血勤皇隊から親見舞いに来たわけです。ちょうどその時艦砲がうち込まれたから帰ることができないで、壕におつたんですね。それで、息子へ、父はほかの人は狩り出

か何かあつたらしいんです。それで壕へ入つたら煙草があるんですね。そこは人は全部出てしまつていないんですね。それでほかの連中は煙草をのむんだから、煙草を持つて、出たんです。そうしたら壕がないんだから、阿檀の陰や道ばたにみないたんです。な兵隊は、今の中城の村長、また熱田の人ですが、彼等がこれから二十米ぐらい離れているから、同じこの丘ひとつで、煙草を欲しがっているんだから煙草をもつて、その連中のところへ行つて、煙草を渡して、ちよつと場所を移つていたら、わたしの立つていたところに爆弾が落ちてですね。城間軍曹（現中城村長）も爆風でやられて、兵隊たちは大勢やられました。

後先きなりですが、首里では、儀保の手前の汀良橋（平良橋か）のところですが、昼は、墓の中にいたんです。そこでは、退却した米軍の占領地へ、食糧取りにやられたり、弾薬運びにもやらされました。首里を後退してからは、われわれの隊は、ちりじりになつたので、民間人といっしょになつて、逃げ廻つたのもいたと思います。三か月足らずのうちに、三十五、六名だった隊員が、十二、三人しか生き延びることができなかったわけです。

わたくしがつかまえられたのは、六月二十六日ですが、今の具志頭村の学校の向かいの丘ですね。アメリカはあつちに機関銃を構えていたんですが、夜明け前ですよ、わたしたちは、そこに入り込んで行つたんです。

今考えて見たら、与根ですね。あつちには丘があります。あつちなんかにも壕がありました。わたしたちは、あつちに、食糧取りに行きましたが、自分たちは食べませんでした。

して、お前がここにおると、あとで父が困るから、お前もやはり行け、といつてやりました。子供の方では、おびえておつたんです。艦砲が熾烈に打ち込みおつたからですね、あした上陸するという日だったもんです。そうして、ちよつと楠正成、正行の里の別れのような、涙を流して送つてですね、子供がどうなるだらうかと、むこうを振り返り返りして。

それから中村榮俊君などもわたしが送つたんです（現琉球政府中村総務局長令兄、文化財指定中村家主人）。

そうして、中城に機協（機銃）がありました。そこへ行つて、ハイケンを受けて戦争に加わるつもりでしたが、第一線へ行くと、先に行つたみんなと、うちとは連絡がとれないわけです。仕方ないから、西原の方まで行つたが、そこでは身を寄せるところがなかったんです。それで壕の入口や、砲、軽砲がありますね、ああいうものの下に一夜をおくつて、それから今さっき、宮城さんが有馬といわれたが、有川圭一、少将で、閣下でした（第六四旅団長有川圭一、と戦史になつている）。

あの方と別れる前に、浦添（村）沢峠のどこそこにいるから、そこへ来いという書き置きがあつたんです。それでそこを訪ねて行つたんですね。そうしたらね、もうそこは前線であつたんです。前田（同村）の線から、あの辺はどうしても、一步も出られない状態だったんです。そうしてそこへ行く道では、隣りにおつた人はね、倒れるんです。ようやくその壕の入口に行つてちよつと入ろうとする時に、直撃を受けて、大勢のものがやられたんです。わたしたちは、やつと壕にすべり込んだ、浦添の沢峠ですよ。

そこから第一線に出て行く将兵は、ほとんど帰って来ないんですね。また今日もあれだけは無くなったか、ああ、またまた今日もこれだけなくなったか、毎日指揮官が指揮して行くんだが、もう帰っては来ないんです。第一線はシーソーゲームです。こうずっと普天間まで押し行行って、また星になれば押し返えされるといふことを聞いていました。わたしらは非戦闘員だから、見はしません。そうして送り出した日はわかるんです。刀を白い綿帯で巻いて切り込みに行くんですね、みんな悲憤な覚悟で出て行くんですが、一人二人しか帰って来ないんですね。二十名くらいから。毎晩ですよ。壕から隊伍を組んで、出て行く時とはちがいが、帰って来る時は、そのみじめさといったらありませんでしたよ。

わたしたちは、ただ食べてばかりいるわけにいかないので、医務室の手伝い、それから經理の手伝い、人が足らんから薪木の採集、水汲みの案内、その辺の道はわかっているのだから。ところが、そこで、バカーとやられて、持ち物はすべて吹っ飛ばされて、三名ぐらい帰って来たです。

それから、ここに大田伍長といつて、親しいのがおりましたがね。彼が監視所にいた時に、砲弾の破片が来て、大きな何かが飛ぶように思ったら、この人がたたくつけられて、切れているんですね。足が。そうして、キリキリこうこうして、まあ、眼をキョロキョロして、空を仰いでいたんです。大田伍長といつても、もうおしまいですね。そういうことで何か上から落ちて来るものがあるようにあったが、ところが後で考えて見ると、監視所が艦砲で飛ばされてですね、多分たたく上げられてから、大田伍長は、何か、爆風の関係

全に占領された。十三日未明増援のため沢岬に到着した独立歩兵第二十二大隊第一中隊（平井隊）も一日の戦闘で五分の一の戦力となった。歩兵第六十四旅団長以下の残存者は、沢岬の洞窟にたてこもって健闘を続けた。（中略）独立歩兵第十五大隊機関銃中隊小隊長北風政雄少尉は戦後当時の状況を次のように回想している。「有川旅団長も独立歩兵第十五大隊長も意志堅固な方でここで頑張るんだと言いついて、梶子でも動きそうにない状況であった」。この記録から見ても、有川少将は、多分自己の守備陣地を死守し、そこで最後を遂げたものと推察する。米軍進出経過図でも、歩兵六十三旅団が抜かれ、沢岬の東、六二輦重隊守備隊は深く進入されているのに、有川少将の死守する沢岬陣地は、五月十日の進出線でも強く抵抗して米軍が抜けなことを示している。喜舎場に本部があった賀谷部隊は、総員千二百余が、沢岬から首里へ敗走する時はわずか賀谷大隊長以下百名そこそこの人員とたった。

この註は、有川少将が、劣勢死を観念しながら、安里さんたちに生き延びるように言いきかす人柄と、三十二軍の最高幹部等が、首里城脱出、これ以上逃げるのできない摩文仁の壕、沖縄本島最南端まで逃走して沖縄県民十数万の生命を失う結果を招いたのとは対照的である。

下級将校は、威勢のいいことばかり聞いていたんですがね。天長節が来て、ますますやられる一方で、それで有川閣下は、「あなた方は、非戦闘員だからもうこれ以上ここに居る必要はない。これから安全なところは南だからね。具志頭から摩文仁、喜屋武とい

で地面へたたきつけられたのではなかったんですかね。目もあいて、口もあいて、それは何ともいえない凄惨なものでした。

ここでの戦争の一つの例ですが、わたしの本家はここにありますが、その本家のいとこの家の隣りに、石塚という隊長がいたそうですが、切り込みに出て負傷して、担架で担がれて来たそうです。ところがこの隊長は、また担荷に担がれて切り込みの指揮に出かけて行っそうです。そうして、その石塚隊長も帰っては来ないんですね。それをきいて、ああ、この戦（いくさ）というものは激烈なもんだな、と話し合いました。将校のほとんど全部、その沢岬、あの辺で全滅したと思いますね。

ところが、何も知らない下級将校たちは、二十九日の天長節を期して、陸、海、空一体の一斉攻撃をする。今度は、菊一号作戦だ、天一号作戦だ、あるだけの敵をぶっつぶして、わたくしたちの旗を揚げるよ。それまでの辛抱だ、とおだてるんですね。

それで、わたしは有川少将に、そうですか閣下、と訊ねて見たんですね。すると有川少将は、「携帯用の爆雷は作ってあるからもう安心」。有川少将はこういって、「奇麗なもんでしような、僕は覚悟している、もうそれで終りだ」と仰有いました。敗ける、勝ち味は絶対ないという意味ですが、なかなか、ほんのことは仰有らなかつたんですね。

註、戦史叢書、『沖縄方面陸軍作戦』五〇五―五〇六頁。沢岬高地地区では十三日（五月）引き続き激戦が展開され、第六十四旅団の中堅として勇戦敢闘して名指揮官とされた独立歩兵二十三大隊長山本重一少佐以下多数の戦死者を生じ、沢岬高地は完

順序で行きなさい。そのうちに何とかなるよ」。敗けるんだから生き延びるようにしなさい、という意味だったんですね。わたくしたちは、あの時は下級将校たちのいうのを信じて、閣下は、面倒だから追いつくのだと思つたんですが、こんなに敗けて、兵隊たちがやられているのを見ながらも、いくさは勝つと思つていたんですね。

そうですね、われわれ民間人は、六名だったんですね。お医者さんの大田さんもいっしょでした。それで旅団本部を去ることにして、下って行きました。一番南の方がいいと教えられたので、歩けるだけ歩いて、その中に途中で、どこだったか分らんけれども、ゴロゴロと大きな音がしたんですが、前の方はみんな打ちのめされているんですね。それで、ずっと迂回して、富名腰（玉城村）というところに行きました。そこは壕もあいているので、半か月くらいいたんでしようね。ところが追い出されてですね、日本軍に。

そうしたら、茅葺きの何か擬装したところだが、壕というほどのところではなくて、避難所があったんです。兵器でも置くところではなかったですかね。どこでもいいからと思つて、そこに入つていたんです。そうしたらわたしが寝るところに、大きな石が落ち込んで来ました。どうしてそんな大きな石が流れ込んで来たか、よくわかりませんでした。多分爆風によるものではなかったんでしようか。これは生命拾（いのち）したな、もしそこにいたらやられていた、と話しましたが、そんなこともありましたが。そうしてそこにいましたら、またまた、日本兵に追い出されてですね、出て行けと言われたんです。

それから、こういうふうならば、わたくしたちの余命もいくばく

もないし、早く死んだ方がいい、いままら壕をさがす必要はないよ、というておったんですが、ちょっと歩いたところで、門中墓らしい大きな墓があったので、そこを開けて、入口を擬装しようとしていると、ちょうどわたしの袖の下から襟首まで、艦砲の砲片だったでしょうね、切り取られてしまいましたね、不思議に、怪我はしませんでした。そんな経験もしましたが、艦砲やいろいろの弾が雨霰と打ち込まれるので、もうどうにもおることができませんでした。それで夜そこを出て行くと、ちょうど喜屋武村の福地というところで、宮城さん（現助役）といっしょになったんです。いっしょになったけれども壕はちごう、もうあの頃から壕はないんです。それで製糖工場のバカスを入れる小屋ですね、そこは小銃の弾でも通ります。茅葺ですから。そこに五十人以上の人がひそんでおった。そうしてそこで三日ばかり過ごした時でした。あれはよほど大きな爆弾だったでしょうな。そのバカス小屋が直撃されてね。わたしは、気絶していたんでしよう、あの翁長さんが、いっしょの連れていった奥さん（西原郵便局長夫人）が、永太郎さん、永太郎さんと起しおった。それで目を開けたら、自分はまだ生きておるんですね。それから、目をキョロキョロ動かしただけです。そうして意識を回復して見廻わして見たら、さっきまで皆が入っていたバカス小屋は、吹っ飛んで、屋根も何もないですよ。屏も。人間も、全部、さあツと散ってしまつて、さんざん、こなごなになつてですね、手やら足やら胴体やら、あつちに飛んでいたり、こつちにあつたり、わたしたちも土に埋められているのを土をかきわけて掘り出されたのですが、わたしと大田さんは爆風が強くなりました。六人の連れ

しがないタオルを切つて、大田さんハイ、誰さんハイと皆に配つてですね。それでわたしは、年をとつた人はなかなか考えがあるな、と思ひましたね。いまだにあれば忘れませんよ、有難かつたんです。

そういうことで日にちを過していると、そこにアメリカ兵が現われたというんです、入り口の人から知せがあつたんです。奥にいたわたしへも。さあ大変だと皆泣いたね。そこに二人の兵隊が来たから、大田さんが手を上げて出る、手をあげて出るんだぞ、そのままただ出るのではないぞ、手をあげるんだぞ、といわれた。わたしははずつと奥にいたので、いくらか安心ができた。どうせ殺されて亡くなつてしまふんだと思つたが、それでも、女から先きになつてひとりひとり出なさいよということ、そうしてわたしたちもついて出たんですね。そうしたら銃を向けたんですね。いろいろ捜すんですね。捜したところこの兵隊さんは日本語がわからないんです。いろんなことをききおる。英語少しでもわかつたらまたやられるかと思つて、大田さんは、英語は遣うな、といわれたんですが、わたしは、ちんぷんかんぷんの英語で、何か君のためにわたしがやつて上げられることがあるか、といつて見たんですね。そうすると、「オー・ユー・スピークイングリッシュ」といって、ひとりひとり訊問するんですよ。わたしの通訳で。大田さんはお医者さんで、わたしは郵便局長だといつたら、お、そうか。それならお前たちは何も心配することはない、糸満に行きなさい、というんですね。糸満に引っ張つて行くかと思つたら、わたしが先頭になつて、自分たちで行けというんですが、糸満という発音が、イヨマン、イ

の中では、翁長さんの長男で、専門学校出ている二十七歳の青年、それがそこで一人やられました。五十人以上の避難民がやられたでしょうね。それはみじめなものであつたです。そして奥さんに繻帯して貰つて、その奥さんの長男を、お父さんの翁長さん、郵便局長と二人で、草取りへらがあつたので、それで穴を掘つて、葬りました。弾がどんどん来る中ですよ。どうせわたしたちも同じく死ぬものだからという気持ちでね。ところが、弾は、絶えず炸裂するんですがね、なかなか人間というものは、死なれない時は死なれないもんですね。そんなに弾が雨霰のように激しいが、全然当りませんでした。

それから、住み家がなかつたもんですから今度は、ちよつと入れてくれんかとお願ひして、あの製糖工場のかまどですよ。そのかまど。砂糖鍋があるでしょう。それが竈に並んでいる。その下へ入りうというのですが、わたしも爆風で体の右がわが全く利かない、大田さんも。わたしたちはみんな、どうしたのかと思つて笑つたんです。「こい」というの（声）も聞こえんですね。手真似ですよ。ままつたく耳が聞こえない。大田さんは鼓膜が切れて、耳からしるがでて、ですね、もう癒らなかつたです。

爆弾の直撃を受けた時は、ちよつと寝ている時だったので、靴も脱いでいたし、着物は吹っ飛ばされてなくなつたし、裸かではだしていたんですね。それでね、この人（同席の宮城盛輝さん）たちが着物をくれて、裸かほまぬかれたんですね。

それから、朝起きると顔は洗わなければいけないからね、タオルがないんですね。それでこつちがね、ごしよう大事にしている一枚かと思つたんです。

ところがね、あのバカス小屋がやられた時に、西原の郵便局長の翁長さんは、ですな、足を切られたんですね、無くなつていたんです。さあ、これをどうするかということです。それから腹はへつてゐるし、力はなくなつてゐるでしょう。ひとりでおんぶすることもできんし、それで、大城ノリさんという人と二人、あれも手伝つて貰つて、棒をさがして来て、その翁長局長さんをね、棒で担いだんですがね。あれは一生がいいで、あんな辛いことはなかつた。ほつたらかすわけにもいかんし、ほつたらかすと殺されるかもわからんし、あの時、生きていて、そんな見捨てるわけにもいけないし、齒をくいしばつて担いだんですが、まだこんなに担いだということはないしね、それでも糸満まで担いだんですね。

行つたところが、この人（宮城盛輝、現中城村議会議長）たちもいっしょに行つたんだが、わたしだけ、ずうつと高いところから見下して指さしているんです憲兵が。わたしは、この人たちと引き離されて、そうして憲兵本部へ連れられて行つたんですね。それで、憲兵が、お前は将校だろというので、いいえ、ちがう、わたしは先きにいったではありませんか。いや、お前は将校だ、といつて連れられたんです。何か間違つたんでしようね。誰かが、あの人は将校だといつたんぢやなかつたでしょうかね。この人たちはすぐ伊

良波へつれて行かれたのに、わたしは憲兵本部。そこで翌日、朝、ほかの人たちは雑語をくれるがわたしはくれないんです。日がカンカン照っている六月二十日ですよ。捕虜とられた翌日ですね。カンカン照る日光の中に裸かにされてね、干されたんです。目まいがしましたし、今晚、早く死ねばいいがなあ、と思ったが、なかなか死ぬものではないです。早く死ねばいいと思うが、生きたくもあるし、死にたくもあるし、それで、少し乱暴でもすると、すぐ打ち殺すだろうと思いがちでも、やはり生に對するあこがれ、いくらか生きようということもあつたんでしよう、死を決行しないんですね。

それから翌日、夜が明けたですね。今日も干されたら完全に参るな、と思つていたんですね。その時、ずつと軍の情報教師がおつたんです。それが情報教師とはわからん、将校ということはわかつておるが。わたしは、思い切つてこのさい、何か呼びかけて見ようと思つて、オッフイシャーと呼びかけたんですね。呼んでもあつちへ行きおる、また呼んだ。すると、お、おれを呼んだのか、といつて引返して来たので、おとといこへ連れて来られたが、殺すなら早く殺して貰いたいな、といつた。ほんとに殺されると大変だがと思いがち、おそろおそろ本意でないことをいつたんです。すると、お前は兵隊だったのかというので、わたしは郵便局長であつたというたんですね。すると、そうか、兵隊ではなかつたのか。兵隊ではない郵便局長でした。そうか、じゃわたしの本部に連絡するから待つていなさい、といつて行きかけたが、また帰つて来るので、これはやはり助ける考えはないんじゃないかなと思つて、かた

いものが来ていたので、毎日三、四十人、何百人という患者の中から、死んでいくのでしよう。そうして病院に葬儀班長というのを置いてありましてね。労務者を何十人送れと、わたしのところへいつて来るんです。それでそこから何十人といつて送るんですが、この人たちは、ずるくて、なかなかやらずよ（死者片づけ労務は、配給、賃金が特別に支給されていたことが、ほかの座談会でも話された）。大体二十名ずつ、二組というぐあいに出し、二名ずつで持ちますからね。穴掘りは三名でやっていました、死人の穴埋めには大変困りました。この労務者たちは、死んだ人を持って来ると、まるで犬猫でも捨てるように、乱暴に投げ入れるんですね。どこの誰れということもわからないからでしようが、あんまりひどいので、わたくしが、労務者たちにお願ひしました。あんまり死んだ同胞を粗末に扱うと、アメリカに、怪蔑されるから、自分の身内がこんな目にあつた場合を思つて、丁寧にやつて貰いたいとお願ひしたわけですね。それから、よくになりました。

コチャには大きな病院がありました。一万六、七千人、二万近くの人に来ていましたからね。労務につくのは約六千人くらいで、あとは、病人と老人とです。可働力のないもの、弱いものが多かつたんです。疵ついて破傷風で死ぬもの、栄養失調で死ぬもの、あの死に方は、ひどかつたですね。コチャは、コチャ瀧原のところではないですね。今の宜野座村の松田です。

宜野座村の宇宜野座にも大きな病院があつて、医者が沢山いました。連絡に行つたことがあります。

宜野座の病院で、バカス小屋に爆弾が落ちて爆風を受けて耳から

ずをのんでその将校の言葉を聞いたら、お前は飯は食べたかという。いいえ、昨日から食べない、といつたら、そうかといつて、兵隊を呼んでね。何か食物を持って来い、といつてからわたしの顔を見て、四回食べないといつたね、四回分持つて来い、といつたので、その通り持つて来たんですよ。それから生きるなど思つて、そうして持つて来た四回分を全部食べました。

それから、その日、じゃ、お前は一般民のところへ送るからといつて、そうして握手をしてね、わたしに。それでも、行つて見ないとわからないな、と不安でしたが、行つたところは、ちよどこつちが（宮城盛輝さん）待つているところ、伊良波で、いっしょになりました。その時、宮城さん（現議長）は、あつちのリーダー、あの場所の指導者、先輩が陣取つているところで心強い思いをし、先輩のおかげで、わたしも間もなく班長になつて、ゆうゆうと食べておつたんですが、まもなくあの島袋に（あゝあの時ですかと同席の喜納昌盛さん）。

捕虜になつたのは六月十九日、島袋に行つたのは六月の二十九日だつたと思うが、島袋は素通りして、コチャ（当時は金武村）いまの宜野座村コチャです。あつちもマリアは随分ありました。そうしてわたしは、米軍から引き出されて、総班長といひますかね。レイバー・チーフといひますが、全部の係り長といつた立場で、人をいろいろの位置につける仕事です。毎日まいにち、三十人くらい死ぬんですね。三四十人も死ぬ。わたしはいつも見たんですよ。マリアで死ぬというより、戦争で怪我して、それが重いものが多く来ていつたんじゃないですか。病気の重いもの、栄養失調の重

い、が出たお医者さんの大田先生はじくなりました。

それから、西原の郵便局長の翁長さん、足が切れて担いだお父さんの方ですが、生死を共にするといつてやつたんですが、米軍に突き放されて、どこの病院につれて行かれたのか、そのまま行方不明です。

大田先生のお子さん二人、お医者さんですが、戦争中生死を共にした縁故で、郵便局長のお嬢さん、製糖小屋で死んだ長男の妹さんが、大田先生の息子のお医者さんの奥さんになつています。

宮城 盛輝（五十二歳） 県農業会技師

わたしの資料関係の松の木を伐つて一銭も払つてない。雨戸を持ち出したといつたのは米軍が来ない前のことですからね。

それでわたしは、三月三十一日に渡口の部落に大きな爆弾が落ちてですね、民間の山羊を一か所に相当に沢山集めてあつたんですよ、そこに打ち込まれたんです。その山羊が吹っ飛んでですね、部落中に散つて飛んだんです。そしてそれが類焼してですね、うちは瓦葺きだったんですが、馬小屋があつたんですからね、ちよどこ駐在の巡査で松川という人が消防をいっしょにやつてくれて助かりました。それでその晩は、墓場でお酒を飲みました。

四月二日の晩方からですね、渡口の今も農運がありますがね、そこを巡査たちが通るんですよ。四月一日に米軍が上陸して、嘉手納署がやられたといつて、沖縄南へ下れ、南へ下れ、といひながら島

袋から渡口へとやって来たんですね。それで松川巡査が出て、その巡査たちに訊いたら、嘉手納署がやられて、アメリカは島袋まで来ているよ、こういうんですね。

その前の晩のことです。いとこが来て、酒を飲みながら、どうするかというんですね。それで、わたしには九十二歳になる母がいたので、この母をかかえているのでどうにもならんから、この壕から出ないということ約束してあったんです。ところが松川巡査に行ってきたら、大変だ、もうそこまで来ているというんだから逃げんといかんよというんですね。それをきくと止むを得ず、わたしと家内と九十二歳の母と、それに七つになる子供とそれだけで、そして七つになる子供には、釜を頭に被せて、晩からですよ、わたしたちの墓場は、部落に近いところですが、奥の方から、みんなが荷物を担いで来るんですよ。おかしいな、これは準備しないといけないなと思って、それでいとこに連絡もしないで、すぐ出たわけですよ。着物もそこへ持って来てあるものだけは持って、それに配給所から貰ってあった酒の一升瓶を持ってですよ、油壺とか何とか、少し持てばいいだろうと思って。まあみんな着のみ着のままといった不用意でそうして家の門まで来てと荷物を下して、二、三日のことだろうから守っておって下さいと、父は亡くなっていましたから位牌に手を合して、出て行っただけですよ。それで、オーケ(和宇慶)へ行ったら人が死んでいるんですよ。渡口の娘で赤嶺の嫁ですがね。まあ、ピユウ、ピユウ弾が来るんだから、それを見たが誰もかえり見ない。赤嶺の親爺もいっしょだが、見ようもしない。初めて戦争で人が死んだのを見たですね。それから西原まで辿りつい

と晩六時頃になったらさあっと帰るから、その時間を利用してね。雨降りが一番心配なかったです。六時後でないと出られない。六時まではあつい墓の中でフウフウやっているんですよ。それから西原で、一度晩に飛行機が来たことがあったですが、こっちから見ると赤いでしょう。だから日本の友軍の飛行機と思って、万歳万歳とやったら、後できいたら敵の飛行機だったとわかりました。あの赤い火を日の丸の旗だと思ったのです。

やはり西原の墓のことでしたがね。わたくしの渡口部落の人たちでしたが、そこへ爆弾が打ち込まれて、十四、五人ほど死んだんですよ。ほとんどが一瞬間に全滅でした。それから隣の墓でも土が崩れて来て、生き埋めになった人たちがいましたが、それはいいので掘り出して助かりましたかね。

それから、そこにおられないといつて、運玉森を出て、与那覇(南風原村)ですな。わたしは県の技師をしていますから、ずっと島尻はあちこち歩いていて地理はわかっていますからね。三十名余を連れて、与那覇を越えて、大里村の大城まで行って、そこへ行ったら、そこは、戦争もなにもない。壕はありませんから山の中の大きな岩があるでしょう。そこにおって、昼中はどこにも出ない。兵隊さんが、ここから来るんだから、南向きの山には絶対に入らない。北向きになって、そこに坐っていると、ちゃんと艦砲の行くのが見えるでしょう。それで戦争の状態からいうと、初めボンとつと真白い煙がずっと天まで上りますね。これは後で聞いたんですが、試験というそうです。それが三回来るでしょう。何番目に撃つたのが的中したといったような意味があったらしいんです。前にい

て、西原には運玉森があるでしょう。その西原運玉森の下に、ハナフサ曲、というまがりひねった道があるんですが、そこに行ったら、墓のあるだけ開けて、人が入っている。開いてない墓があるならどこでも開けて入っていいという格好になっていた。そうしたら、そこにいた人の中に知った人がおりましたので、こうこうだからといったら、いいでしょうということになって、そうして着物を一枚借りて来て、洗骨もされない棺の中の死んだ人をざっと洗って、その骨を着物に包んで石の上に置いてね、そこにいたんで

註、戦前は人が死んだら、ほとんどが火葬はなくて、木棺に寝かして墓におさめ、一年ばかり経て、骨を洗い清め、かめに納める。洗骨して葬に納めたら恐怖心が薄らぐが、棺に寝ている死人には恐怖心を持ち、墓の中でそれと同居することは考えられないことというのが通念になっていた。

その時からは、墓場を開けるのは、何でもありませんよ。洗骨してあるのが何であるかが、すぐそこに入り込んでね。そうして、そこへ行って一週間ばかりした時でしたが、持っていたカバンで墓の門を閉ざしていましたが、爆風が来て、パッとカバンをこなごなに散らしてしまいましたかね、しかし怪我人はひとりも有りませんでした。それでそこは妻が西原の者ですね、その妻の兄弟の連中がよってたかって来て、そこにはいられないから逃げようということ、そこには十四、五日おったですがね。

それから晩になったのでそこを出ました。アメリカは雨が降る日

いましたが、大城は、戦争が全然ないですね。牛も馬も沢山あって。そうしてわたしは農業指導をしていたもんですからね。その辺でも指導した若い者だちがいました。それでその連中が毎日毎日来るんですよ。時には豚をつぶした、時には山羊をつぶしたといつて持って来てくれて、戦争はなくなった気持ちで、それで一か月おつたが、岩の下から爆雷といいますが、それをかついで二、三十名くらい出て行くんですね、それが一人か二人しか帰らないといったことがありました。

それから、傷受けた兵隊がね、わたしたちのいる壕に入り込んでですよ。戦争はわたくしたちがやるのだから、あなたたちは、早く前に進みなさい、というんですね。しかし壕は広いのでわたしたちは動かないで、いっしょに暮しましたが、臭くてね、ウジですね。疵がくさっているんですよ。

そのうちに友軍の方でも、わたしたちが、九十二歳の母を連れているので、母をおんぶして出て行くことを理解してくれました。それで、わたくしは、畑を買って、芋を掘って持って来て、家内に夜芋をふかさせて、兵隊たちにも上げたので、わたくしたちに、おばあさんに上げなさいといつて饜節などもくれました。親切でしたよ。仲よくしてくれました。大城では食料には、ちっとも不自由しませんでした。負傷兵の怪我がくさって、臭いのは閉口しました。

そこでわたくしの妻の母が、ちょっととした感冒でしたが、家の中ではなくて、山の中でしょう。それでそこで亡くなりました。また一人は、山の中でしたが、小さい爆弾だったんですがね。どうい

ふうにして当たったか、死にました。西原の親類関係のものであったのでした。

それからもう一つ。新垣さん夫婦、与那原の校長でしたがね。六時後は艦砲も来ないし、飛行機も飛ばないし、弾はばったり止まるんですがね。それで六時すぎから、民家の家を見に出かけたんです。ところが六時すぎでいたのに、爆弾が艦砲かわかりませんでした。御夫婦いっしょにやられました。

それから大城にいられないことになって、具志頭村を通って南に行くことになりました。それで、大城を出て、富名越（玉城村）を通って前川（具志頭村）に行きました。前川の辺からは人が倒れておるですよ。馬も倒れている。何とまあ、戦争というのはこんなもんかねと思って、もう死んだ人を見ても何の気も起らない。自分が生きればいいからと思ってね。前川ガラガラというところに行ったら人がいっぱいいて、もう入れないんだから、下って行って、港川に行く川口に、岩があつて、そこに入っていたんです。そこはもう港川の橋に近いところです。ところがあの時に、大雨が降ったんです。そうしたら、激しい濁流に人間の死体が流れて来て、大変でした。多分何百人、ひよっとしたら千人を越す犠牲者がたつたのではないですか。逃げるのができなかったんです。そこでは、岩の下にいたんですが、眠ることはできなかったんです。それでそこを出て具志頭へ行って、真壁へ行きました。そこは非常に激しくて、何という弾ですがね。チュウチュウ、チュウチュウと来るんです。そこを、母をおんぶして歩くんですが、あまり弾が激

もないので大変に危いからということで、具志頭では一晩も泊らないで、福地に行つたんです。

それから福地におちついて、その人（大城農業技手だち）に頼んで、製糖場に行つて見ようといつて行つたら誰も入っていないんですよ。それで製糖場は、部落民がそこを保護するために、セメン瓦をはがしてですね。木は全部爆作りに持つて行ってなくなっていました。そうして鍋にはいっぱい水が充たされて、それにセメン瓦が詰められているですよ。これは幸いだと思って、前の畑から麦藁を刈りて来て、それを敷いてね、そしてそこに三十名ぐらいのものが入っていたんです。それで一べんはすぐ近くに爆弾が落ちましたが、怪我人は出ませんでした。われわれは、鍋底のすずで、顔は真黒になっていました。そこへ今さっきの安里永太郎さんたち、お医者さんの大田さん方が見えたので、入りなさいといったわけです。大きな製糖鍋が六枚が並んで据えつけてある竈ですから、奥の方はすいていました。それで奥の方へ入って貰いました。

そうして、アメリカは六時になると引きあげるの、それから芋を掘つて持つて来たり、蕪を引っこ抜いて来たり、大豆を取つて来たりして、食べていたですよ。

ある一日、六時すぎからですね。あつちは大きな井戸がありましたが、今は埋めてないですが、そこへ水汲みに行ったのに、そこに爆弾が落ちましたね。わたしの友人で農業会の技手をしていた崎原というのがやられました。

六月の十九日になってですね。さっき安里さんが話されたアメリカが来て、出て来い、出てこいということで、うちの部落の宇区長の

しいので、大いそぎに通っていると母が、用便したいという。激しいから、ちよつと辛抱しなさいといったが、激しくて何でもどうしても下してくれという。仕方ないので母を下して、母は妻がおんぶしていたんですが、母が道端へ行つたと思う間もなく、五間くらい前に爆弾が落ちて前を歩いていたものが二人やられました。即死ですね。まっ先きになっていた七歳になるわたくしの娘に破片が当たって、足を少し怪我しました。もし、母がそうしないで、そのまま歩いていたら、わたしたちは、みんなやられていたと、やっぱり、人間には、運というのがあるなと思いましたがね。真壁で、大砲が据えつけられているところがありまして、そこが爆弾でやられました。自分が連れているものは、一人もさしつかえありませんでした。

それから福地に行つたんですね。福地には、大城という知り合いの農業技手がいまして、その家に行つたんです。ところが防衛隊へ行つておらんというのでした。しかしどうでもいいからと思つてその家にいた。翌日大城が防衛隊から帰つて来ていました。がね。

話した後に戻りますが、具志頭の役所のある前の道で、いっしょであつた八十いくつなる西原のお爺さんを見失つておらない。どうしたのかわからない。戻つて行ってさがした。安里部落の方もさがしたが、とうとうさがせません。

具志頭の部落行つた時、平良辰雄さん（選挙で沖縄群島知事になった）などおつたですよ。そこは壕も何もない。与那原の人で、上原といつていたが、軍人も大勢いたが、上原さんが、ここは壕も何大城亀というのが、ハワイ帰り、ある程度英語をしゃべりおつたが、この人出て行つて見ようとして行つたんですがね。すぐ連れられて行つてね、案内役ですよ。この人は、アメリカを連れて来て、すぐいなくなつたんです。ただ道だけ案内したんですね。それでわたしは少し英語がわかつているから、出て来いというので三十人余りのものが、みんな竈の中から出ました。荷物があるから取らしてくれないかといつたら、いよいよというので、僕等は、うちから持つて来ただけ全部持つて、糸満へ行けということで、糸満へ行くことにした。

註、このところは、安里永太郎さんも話している。安里さんはハワイ帰りの方、談者の宮城さんもそうではなからうか、共に英語ができる。

それで糸満へ行く道中、僕の妻が母をおぶっているのを見てね、トラックに乗りなさいという。これが大変恐いですよ。それから歩いて道ですがね、名城部落まで来ないうちから、あんまり臭くてですね、それはまあ、道も臭も真黒でしょう人が死んで。あの辺から、ほんとに、こんなにもみじめになつたかなと、においがですよ、臭くて。

途中から、年寄を背負っているのを見て僕等だけ、アメリカカーのトラックに乗せられたんだが、それがまた心配なんだ。トラックに乗せてどこかに持つて行くのでないかと思つて。いいことのようにあつてまた恐怖心が出た。そうしてようやく伊良波まで来たら下された。そこで、最近まで琉銀の監査していた新垣榮君があつた。北部でつかまえられたそうだが、嘘を少しも言わないよ。今までのこ

とを真直ぐ言わんと疑われる。そう言われたので真直ぐに言ったら、お前はCIDだという。CIDというのは何をさせるかということ、収容されて来るものをMPがいて、さぐらすんですよ。ナイフ持っていないか、時計持っていないか。ナイフみたいなのはまあ何でもないが、時計などはMPが盗むんですよ。僕はその時は知らないから、言いつけられる通りにすると、わたしはあの辺は農業指導で皆に知られているでしょう。それで、この宮城はスパイであったね、と噂が出たんです。毎日ですからね一週間くらい。寝るのはいつも一時二時ですよ。そうして僕はここが嫌いでしたが、母と妻子は、トラックでもう移動してしまってますよ、それで僕は、あれ等がどこへ行ったかわからなくて、随分心配になりましたが、後でわかったのです。母は、あれは残されて殺されたのではないかといいて、心配して、物も食べなかつたそうです。母たちは野嵩(宣野湾村)へやられていました。

伊良波でいちばん感じましたのは、水田といったかな、裁判長がいたですよ。勅任官(勅任官ではなかつたと思う)でしょう。この人は剛情だね。絶対日本は負けないというでしょう。どこまでも頑張るんですよ。伊良波のキビ畑の中で訊問するんですが、時どきは皆の前へ出して訊くんです。日本が負けているということがわからんか、といって鞭で時どきはなぐって見たり、それから、畑の中の塵を拾わすんですよ。この塵をとれ、あの塵をとれといって、畑の中ですから塵はいくらでもあるでしょう。面白がついていじめているわけですよ。大変な虐待でした。ああいった連中はこういう風に処分されたか、あれを見て、戦争に負けるといことは大変だなと

ですね。わたしは、総務におつたから、直接それまでは関係しなかつたが、人夫に掘らして大きな墓場、墓場というのはうんと大きな穴を一か所に掘らして、それにどんどん、どんどん投げ込むんですよ、死に次第、誰ということもわからんですよ。毎日毎日何百人と死んだでしょうな。島尻からこの収容所へ下りて来た人たちが。わたしの母は民家で、そう苦勞もしないでなくなりましたかね。その時、届けを出すようになっていたので、わたしは届けに行つた。医務課長はO・Cさんですよ。O・Cさんが年は幾つなるかというから九十二といつたら、遅そすぎるんだ、というんですよ。あのデブが。ああ、そうですかとわたしが厭やな顔で応じると、あなたの何になるかというので、母ですといつたら、さすがに、気が咎めたのか、ああ、どうもすまなかつたといっていました。あのO・Cさんですよ。

その時には、わたしは総務課長していましたがね。配給所がありますね。そこから箱を貰つて、自分で穴を掘らして、埋めました。それから照喜名といって歯医者がおりましたがね。その人のおじさんも僕の母の隣りに埋めてあつたですがね。あれは先きに遺骨をとつて、わたしへ、わたしの母を埋めてあるところが、水が湧いて棺も遺骨も浮かんでいるよといったものですから、そうかとおわてて行って、掘つて見たら、棺が浮いていますよ。遺骨も全部浮いてですね。それで、水で洗つて、うちへ持ってきたのですがね。母の命日は八月一日で、今年は満二十四年、二十五年忌でした。そういった苦勞をしました。

それより先きのことではなかつたですがね。市長選挙があつたで

思いました。

それから中城の比嘉セイ一という人がいましたがね。この人なんか、ほんとに輝一本かけて来ているですよ、手を上げて。それでカスリの着物を一枚さがし出してやりましたがね。その比嘉セイ一君は、あとで死んでしまったんですがね。

捕虜になる時ですがね。恥かしいことだ、困つたことだと思つて何ともいえない気持ちでしたが、伊良波へ来たら、当間重剛さん(元琉球政府主席)なんかもいるし、裁判長もいる。何でもないんだなと思つたんですよ。

そうしてコザ(越来村、同村胡屋一帯を米軍はコザと呼んでいた)に来たら県庁の連中も沢山いますよ。皆仕事についていた。まあ、休んでいようと思つて、休んでいたですが、アメリカカーが、仕事しないと配給くれないぞといつてですね。アメリカカーに引つ張られて歩いていましたが、越来部落から蒲原(かまはら)に下りるところで、日本兵ですね、二人銃をかついで、北部から逃走して来ていたが、鉄砲持っていたので、アメリカカーにやられてたんですよ。そうしたらその死体を片づけるといわれたんですよ。仕事しないと配給くれないというので、担架を持って来て、二人連れて来て埋めましたがね。それは戦争が終つてからですよ。そんなにして、戦争終つてから二人の日本兵が殺されましたよ。

それから病院は、宮里さんが病院長であつた。名前をかえているとかで、ほんとに宮城とかいいました。コザ収容所の病院ですよ。そこにはまあ、あつちからこつちからも集まつて、それに子供等も診療所でしょう、いわゆる孤児ですな。どんどん、どんどん死ぬん

でしょう。その時兼島由明さんも市長になるといってですね。また今の仲地君がはじめて村長であつて、はじめて市長選挙の一般投票ということになった。そうしてわたしも犠牲候補みだいな、わたしも市長候補ということになって、仲地君が市長になりましたがね。仲泊君ですね、仲泊良雄。与那原のあれが助役で、わたしが総務課長。そういうふうになって、コザ市、あの時コザという名前アメリカカーがわからないですよ。コザというところ美里のあつちにあるといつたら、いやあれはスモールコザだ、というんですよ。上から撮つたあの時の写真による地図を見たらですね、ゴヤとあるでしょう。

あれのね、間違いだらうと思つてね、ZYとね。あれを直せばちよつと似そうにあつたが、あの時はすべてローマ字だから、この三名で協議してね、税務署なんかはコザという字を書いたりしていたので統一しようじゃないかということ。またあの時は二世からわたくしなんかの役所には、仮名でやりおつたです、平仮名はなかつたが。それでコザと当てて作つて、それはわたしたち三名でやつた。だがコザ市では、越来からコザ市になった時に、あそこでつけたとなつていますが、実は、収容所で一番大きかつたのはコザですからね。あの時は、コザ地方庁になつていたんですよ。地方庁長ですね仲吉君は。そうして僕は、移動の形で、キングという人と、ブラウンという人とね。その二人の時に移動が始つてね。そうしてわたしは、ブラウンさんに連れられて、ずっと島尻を廻つてね。ここはここに移動させよう、この方はあそこに移動させよう、そうしてずつと移動課長になつてずつとおしまいで、僕は移動でついで廻つてですね、ブラウンさんという隊長について。

志喜屋さんが知事になって、又吉さんが副知事の時、又吉さんから、移動課長として、政府入りをしないかと呼びかけがあったが、まあ、今までやって来たんだからひとまず自分の家を整理しなければいけないと思って、お断りして政府入りはしませんでした。

移動というのは、各部落を自分の部落に直接移動させるのではないんですね。何か訳があつたんでしよう。あちこちの部落民を一か所に移して置いて、ある期間は必ず一か所に収容してから各部落へ帰したんです。

それから問題がありました。コザ高校のことと試験場の問題です。コザ高校のことは解決しませんでした。試験場問題ですね、マー地（琉球石灰岩風化土壌）もジャーガル（青色泥板岩）もその他すべての地質の条件がそなわっているとこはなないかというから、登^{のほりまた}又を調べましたがね。マージが少なすぎるといので、今の越来試験場に決ったんです。

あの時は、僕は移動の關係をしておつたので、自分たちの親類關係がおつてね。名前書いて出したらブラウンさんがサインして、二世が連れて、あちから自由に移動ができた。それで福山に親戚がいたので、名前書いて出して、連れて行ってくれといつたら、向うから誰も移ろうとする人はいないから僕は行かないと断られた、その男が変てこな男だったので。それで二世に頼んで、瀬^{だけ}まで行つたんですよ。同じ人員だけ連れて行けばいいだろうと二世に相談したら、おとなしく、そうかなといつてきてくれてね。そうして瀬嵩まで行つたら、山の中にいるんですね。それで一番近い親戚から五名トラックに乗せてね。みんな栄養不良で青ざめているんですよ。

く、銃でお尻をつついて労働を早く、早く、といきつく間もないようにいじめ、それで喜んでいたが、コチャにその兵隊が来て、やはり班長の安里さんへこの兵隊は便所掃除をはじめ、みなが厭がる仕事をさせると命令されたと言つた。

註2、宮城さんの談話中に市長選挙、最初の政府入り勧誘などがあるが、終戦の翌年、四月民政府発足に際して、又吉副知事から移動課長就任を呼びかけられたものと察しられる。備考。

一九四五年九月十六日。知念、前原、コザ、石川など十六地区で市会議員選挙。九月二十五日、同十六地区で市長選挙。一九四六年、四月、二十四日、志喜屋知事に軍政府より辞令交付（沖繩タイムス社刊、沖繩年鑑による）。

安里 永昌（四十一歳） 台湾、教職

二十一年の十二月に引揚げて来ましたが、最も強く感じたのは、緑がなくなつて、荒蕪たる姿に変わつていたことです。那覇、首里、浦添方面は、木は一本もない。草もまったく見られないといった感じで、建物もなかった。

中城城址の南側ですね。あそこは戦前だったら、青あおとして、遙か頭頂方面から眺められるところでしたが、帰つて来た時は、ほとんど禿げ山になっていた。この辺は、あまり戦争してなかったのか、いくらか木がある方であつた。

住民についていうと、もといた人の三分の一くらいに減つている

ね。それで二世は驚いて、これらはマラリアだ、つれて行っては変だ、というんですね。僕は、いや、マラリアではない栄養失調だから是非乗せてくれ、行つたら隔離して置いてもいい、僕がブラウンさんに相談するといつて、五名連れて来た。その次に、一週間ほどしてまた行つたら、残つてあつた七名の中、二人は死んでしまつてた。瀬嵩の山の中で、惜しかったですね。あの時残つているものから連れるんであつたと残念でした。単なる栄養失調で、まだ助けられましたからね。

それからコザで感じましたことに、アメリカは無責任といひますか、出鱈目みたいなところがありますね。本部から積んでやるんでしよう。衣服でも、毛布でも、食べ物でも何でも。それをこの隊長のサインを貰つて行けば、どこに下してもいいようです。それでコザは何でも汚泥に貰えましたね。

言い落しましたが、福地ですね、空き家から、何でも取る。入つて何でも取つて食べていい。米でも、豆でも、味噌でもさがして取るし、畑の物もそうだし、そのために、今は、盗人がそんなに多くいるのではないのでしょうか。戦果といひましたね。そういうことから、人の物を盗むのを当り前というふうには、今の子供等もなつているのでないですかね。

まあわたしの話は、大体こんなもので、いちばん苦しかったのは福地だけみたないなもんでした。

註1、日本兵、裁判官をいじめた話の時、安里さんが、話をはさんだ。ああ将官のつき添い兵が、捕虜なつてからの訊問に際して日本不敗を言つたために、宮城さんの話しの裁判官虐待と同じように思つた。自分の先輩、後輩の連中が、ほとんど亡くなつて、外地や外国から帰つて来たので、だんだん人口が多くなつて行つた。

人家は、完全に残つているのは中村家とあの近所に二、三軒だけで、半壊が約三十軒くらいありました。あとはほとんど焼かれていたが、あとで聞いたが、敗残兵の掃蕩という意味で焼いたということでした。それから半壊のうちで何ですね、材料を盗むために、鋸なんか持つて来て、切り取つたのがあらしいですね。付近の部落から来てですね、瓦葺きの立派な建物であるけれども、あるいは半分取られたり、あるいは柱が切り取られたりして、約三十軒くらいあつたわけです。

それで何よりもまず住宅を作るわけですがね。いわゆる企画住宅といひますか。二間に二間半の家ですが、材料がないから、山に残つた松を伐り出して、これで間に合した。約一年半くらいは、住宅建築をやつたわけですが、部落を四組に分けて、お互に、相互扶助で家をたてて、ようやく雨露を防ぐことが出来ました。戦前港川石といつて、島尻から持つて来た石で作つた家とか石垣とか、それがほとんど崩されてですね、持つて行かれて無くなつてしまつたが、あれも後できいたら、桶をかけた道を作つたりするために、材料が扱いやすいといつて取られたといひました。米軍のいひつけでしょう、終戦直後であつたらしいから。

それから生産方面のことですがね、畑が自由に使えないですよ。それで戦争終つて直きですから近い、いい畑からどんどん耕していくんですよ。自分の畑ではないが。そこへ何か植えるんですね、野

菜とか芋とか。しかし自由に耕せない時になって、仕方なく割りあって土地を耕しておったですよ。二か年か三か年かして、自分の畑にいろいろのものを植えつけることができたわけです。

食料配給は、宮城盛輝さんからお話がありました。が、外地から引き揚げて来ますと非常に窮乏でありました。はじめの一月くらいは、珍しい物が配給されて喜んでおったわけでしたが、やっぱりそれで生活することになると、量も足りませんし、すぐあきが来るわけです。それで、早く米を作ったり、芋を作ったり、自給食料を作るようにはかったというわけです。

その後、何よりも恐かったのは黒人ですね。畑で働いている婦人を狙って乱暴をする。殺害ということは無かったですがね。計画的に畑へ廻って来るんですね。もう少しで危かったという時に騒ぎ出したことがありますね。これは回数はだんだん少くなりましたが、今年もありましたよ。安心して畑に出られませんでしたね。それで畑に行くには、大抵、隣近所いっしょに行く。あの屋宜原の事件がありましたね。ちようどあのちよつと前ですね。あの辺の畑でもう少しで黒人が……、学校帰りの生徒たちが見つけて騒いで事なきを得ましたね。戦後二十数年になってもあの辺を歩くのは、今もって恐がります。

喜舎場・屋宜原・仲順（北中城村）

宮城 聡

時 一九六九年九月二十一日（日曜）午後六時始
場所 喜舎場公民館

氏名	現住所
米須 長ウシ	
仲村 長康	
玉城 トミ	
比嘉 清昌	
安里 要江	
親戚祖 光徳	

解説

喜舎場に本部を置き、上陸米軍に対する先陣部隊であった独立歩兵第十二大隊は、米軍上陸の第二日目、四月二日の夜、住民にはひとこととの知らせもなく、南の方へ全部隊が後退した。

信頼していた友軍（日本軍を沖縄県民はそう呼んだ）に置き去りにされた喜舎場・仲順・屋宜原等各部隊の住民たちは、米軍の不意の進撃に驚きふためき、取るものも取りあえず、着のみ着のまま、衣食を持つことさえできず、あてのない南への脱走をはかるほかは

なかった。

喜舎場（字）の現区長親戚祖さんは外地に当時いられたので話して貰えなかったが、三か字の出席者、また座談会の開催についてお世話して頂き、同席して下さった。

それで、この三か字を代表して、五人の方に話して貰った。

四人の方のお話は、紙数を多くとっていかないが、各おの異なった体験で、沖縄県民が、今度の戦争で半めさせられた苦難と悲惨の実情を異なった形で描き出し、その悲しい姿を見ているような気持ちになって心が刺された。

安里要江さんのお話は長かった。しかし、紙数を惜しまず、お話をそのまま記録した。お話しは、言葉にも前後錯綜したり、「です」が多かったり、事件も前後したり二重映しになったりする。

これは時間がない関係である。もしゆっくり順序立てて話して貰ったら、人間の一大ドラマになるお話しだと思った。時間はおそくなっているし、話すことは多い、しかもまだ後に話す人がいる、そういうことで心がせき、それは仕方ないことであつた。

抱いている子が冷たくなり死なす場面も二重になる。多くの座談会をしたが初めて聞いた姑の変った亡くなり方は、取り落されて、司会者の引き出しで終りに語られた。とこがる姑が午前中に亡くなって、その夕方には、舅が敵弾で孫たちを守る壕の口の防塞となって犠牲になる。

わたくしは、この時間関係だけは、時の経過に依って置き換ええようと思つて書いて見たが、多少でも嘘になるのを惧れて、やはりお話しのままを記録した。言葉の抑揚、実感溢れる感情を示して心を